

伊都岐島繪馬鑑

初編

二







嚴島扁額縮本初編卷之一

目錄

寶船之圖 たからぶねのづ

擅風之圖 とんぷうのづ

楓鹿之圖 もみぢかのづ

那須與市射扇之圖 なすよしやまをうし

源綱誅羅城門鬼之圖 げんむねのつらやまのまをころす

松竹梅之圖 まつたけうめ





百人一首之圖  
寒山拾得之圖  
兒持山姫之圖

初編卷之二目錄終

嚴島扁額縮本初編卷之二

藝陽 千歳園藤彦著

○寶船の圖

豎二尺五寸  
横三尺五寸

本社内陣正面の上掲

天明四年正月吉日筆者不知

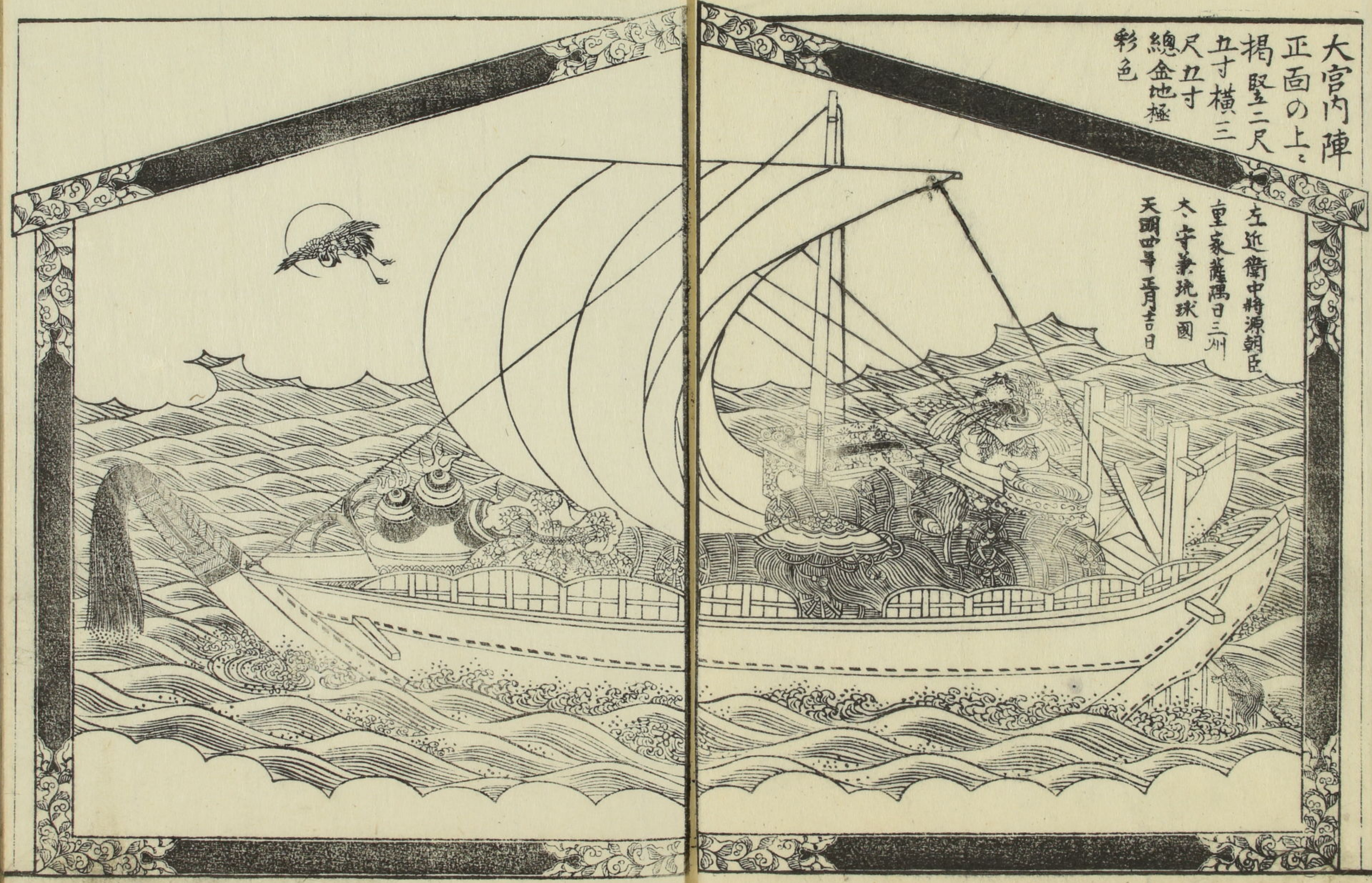
世小寶船といふ紀事云節分の夜船を白紙に貼て諸臣に賜ふ地下の良賤  
も亦畫船を以て臥榻の被の底に布て寐る今夜吉夢の時來歲福を得る  
と云若悪夢見し時翌朝流水に流して悪夢を流くと云和俗の船の内種  
々の珍寶を画く故に寶船と稱と近年これを又梓ふりばめて童兒市中賣  
寶船々と大呼く是又西土の紙船に類は居家必用云船に乗月  
み入ると夢の時吉船とて渡ると夢の時大富貴を主ると云

因云船の神代の卷ふり一書に鳥磐椽樟船と云ころふねをりて



大宮内陣  
正面の上  
掲堅二尺  
五寸横三  
尺五寸  
總金地極  
彩色

左近衛中将源朝臣  
重家薩隅日三州  
太守兼琉球國  
天明四年正月吉日





蛭兒を乘順流放棄す日本紀云崇神天皇十七年秋七月朔  
りふいそく船を天下の要用に令渡邊の民船をきよめて甚歩運に苦  
む其國を令て船を造るを得り冬十月始て船をほくす  
もまおのしめ後方のみよめをさるなり船のゆりのきこる

○擅風の圖 堅一箇四尺 横一箇一尺 本社經座の外西向小掲

文化二年乙丑種八月吉辰藍江畫 藍江姓々中井名直字  
子養浪花の人

大牟記の二ふふ太公ねと君後醍醐天皇の御謀叛を事細くすく先人  
源中納言具行右少辨俊基日野中納言資朝あり各死罪  
ふ行るべしと評定一決して先去年より佐渡の國へ流されて  
おくす資朝卿を斬奉るべしと其國の守護本間山城の

入道お下知せらるるこのと京都へ聞えられ資朝の子息國光中納言  
其頃ハ阿新殿として年と歳十三にておきり給ふ父の御囚人あり  
しより仁和寺邊に隠れたり此頃父の御誅せられ給ふ  
をまじひにわれは一目最後の御ありと見奉るは母上に  
御暇を乞ひ絶ふ中間ひりをめり外へ都を出て越前敦賀の津を  
り船に乗佐渡の國へ着ひたり扱も本間が館に至り中門に  
立ちあぐれを折節僧のあり給ふ阿新殿の子細をききて急ぎ本  
間お語る本間しと子と岩木あら給を哀ふおひ聽てこの僧を以  
て先持佛堂へいざおひ入てぞおきりたり阿新殿ハ疾も父の  
御を見参らやとやとれまへども關東のまきえ如何あらんとて對  
面を許さずして隔て置たり扱五月廿九日の暮資朝卿を籠



了中一夜ふ入輿ふ来十町たり持ちて河原へ下せた少も臆  
たやん便敷皮の上ふとら座して辞世の頌を書ふ 中畧 首を將  
白刃に當截斷ち一陳風と認て筆を閣う人も太刀取を後  
とらとみえが首の敷皮の上ふ落て死骸を座してどして彼  
僧来て葬禮を營き空き骨を拾いて阿新ふ奉れば阿新を  
一目見たり倒れ伏し今生の對面終ふ不叶して唯白骨を見とよ  
と泣悲うふし理りあり阿新を幼稚あれも可存あれや遺骨を  
を中間ふもとて高野山へをたふすを我身を勞るうにてふ本  
間が館あぞ留りぬらふ これを本間が心多く父を見せたりかくて阿新晝  
を病うにて終日卧一夜を忍やたぬけで本間が寢所を窺ひ  
隙河を本間を殺し腹切んものをも思ひ定て移らひうふ或夜風

雨をりく番人ども皆遠く卧されを今我待とらふと本間が寢所  
を伺ふ今夜を父子ともいふ爰あつたゆとて前ふ資貞朝を斬し本間  
三郎只ひとり卧りたりやこれ時ふ取て親の敵とせん定て  
とらをかんととれど我身の元来太刀も刀もとぬ身はて只人の  
太刀を奪ふと憑をれど灯の明をれを立寄をやがて驚もやを  
おん煩むはらにをりや一夏あれを蟻といふ虫のあまこ障子の  
まじり内へ入るて灯をもち消ぬまを今を右と嬉しとて三  
郎が枕あをり揺りぬふ三郎を痛く寐たり先刀を取て腰  
ふち太刀をぬけて胸をふら一當まら足あて枕をもちて蹴た  
まひる蹴られておろく三郎を一太刀小臍より疊へばと突通  
かへも太刀あぞ喉ぞえ指切て心閑り後ゆ竹藪へぞ隠る



大宮内陣脇經座東側掲  
 總金地極彩色  
 横一間四尺  
 竪一間一尺

廿四江□



文化二年乙丑秋八月吉辰



ちりりガ三郎らつとひひ聲み番衆ども騒ぎつてさてと阿新殿のま  
るぢありと各柘明かりよとて本草の陰まじらぐりて阿新も今と  
自害もやせんとかやりて何れも今一度命もあぐら君の御用にも  
とら父の志意をも達しならんを忠孝の道はともあらんぢらんと  
かひいへして藪あつ竹をささりて梯とあはらくと登れば竹の  
末堀の向へおひき伏してをちくわりのをも越して夜はまど深し  
漆へ出船も来たるやと浦邊の方へ行方ふ山伏一人行合せ此兒を  
見て事の様をまて我々の兒を助むとさぶらばおんくさるや  
漆へ連出んと肩背ふ乗てちどちどかきとへと看にける夜明  
て便船やあらんと尋りては連の澳ふ大船順風ふ帆を揚ん  
とまると見て手を上其船便船申らんと叫びればも耳にも入ら

漕出山伏大ふ腹を立柿の衣ふらと珠數きつとさりと押搦んで  
一時秘密咒生々而加護奉仕修行者猶如薄伽梵明王の本誓言ま  
らば権現金剛童子天龍夜叉八大龍王其船度一たをせむや  
と祈りては明王擁護やまむらん忽惡風起て彼船覆んとは  
榜人あつて手を合せ山伏の御坊助王と手々ふ船を漕度一兒  
山伏諸どもり屋形の内へ入られを忽惡風止て追風とふる扱あ  
より本間が追手の兵數百人馳来れども更も目もくれを終ふ其日  
の暮程ふ越後の府ふぞ看みける誠ふ阿新丸の孝心ふもて  
明王の加護こそ難有られ 已上太平 記の畧

因云資朝の權中納言從三位檢非違使別當後醍醐天皇の朝の人日野俊  
光卿の三男の謠曲ふを資朝父子對面と作て阿新を梅若と山伏の  
都東山今熊野榊木の坊師の阿舎禁とふ此圖を俗に檀風とふ



享保二十年七月六日

總金地極彩色



本社内陣經座の上掲

横一間余  
縦二尺

願主大坂

江川庄左衛門重勝

法橋春卜筆



あつ故にやいまで考げ但山伏の秘密勤行神に通して順逆の風を擅ふ起を以て名づくもの

○楓ふ鹿の圖 堅一間余 横一間二尺 本社内陣經座の上掲

享保二十年乙卯六月日法橋春卜畫 春卜の大岡氏或愛量雀吐号以狩野氏の法を學んで常の師多寶曆中歳八十四以て没は名聲時高く實ふ近世の名手あり有本氏の子を嗣とも名甫政春川と

鹿々格物論云鹿の性驚烈多一能良草を別佗獸ハ多ク十ニ辰八卦ふ屬も惟鹿と云ふに二千年以て蒼鹿と云り又百年以て白鹿ふ化と又五百年以て玄鹿と云る云下畧○鹿と○まぐさ○かやぎ○紅葉鳥○錦馬○斑龍等の異名有但もが故も螺蟻みて鹿の異名と云ふを非あり

○紅葉ハ紀事云九十月東西の山岳楓葉遊人の興を催し殆千春

の花の節ふ下ら凡春櫻花有る地も秋冬ふありて必紅葉あり云○本邦ハ楓と稱ハ雞冠樹あり○萬葉集云蝦手○八雲御抄ハ紅葉を詠るの木○うへで雞冠○まゆこ檀○まど檀○まくり桐○かま柿○片と葛○ちくら櫻○はくそ柞

○那須與市射扇圖 堅五尺 横九尺 本社經座の外掲

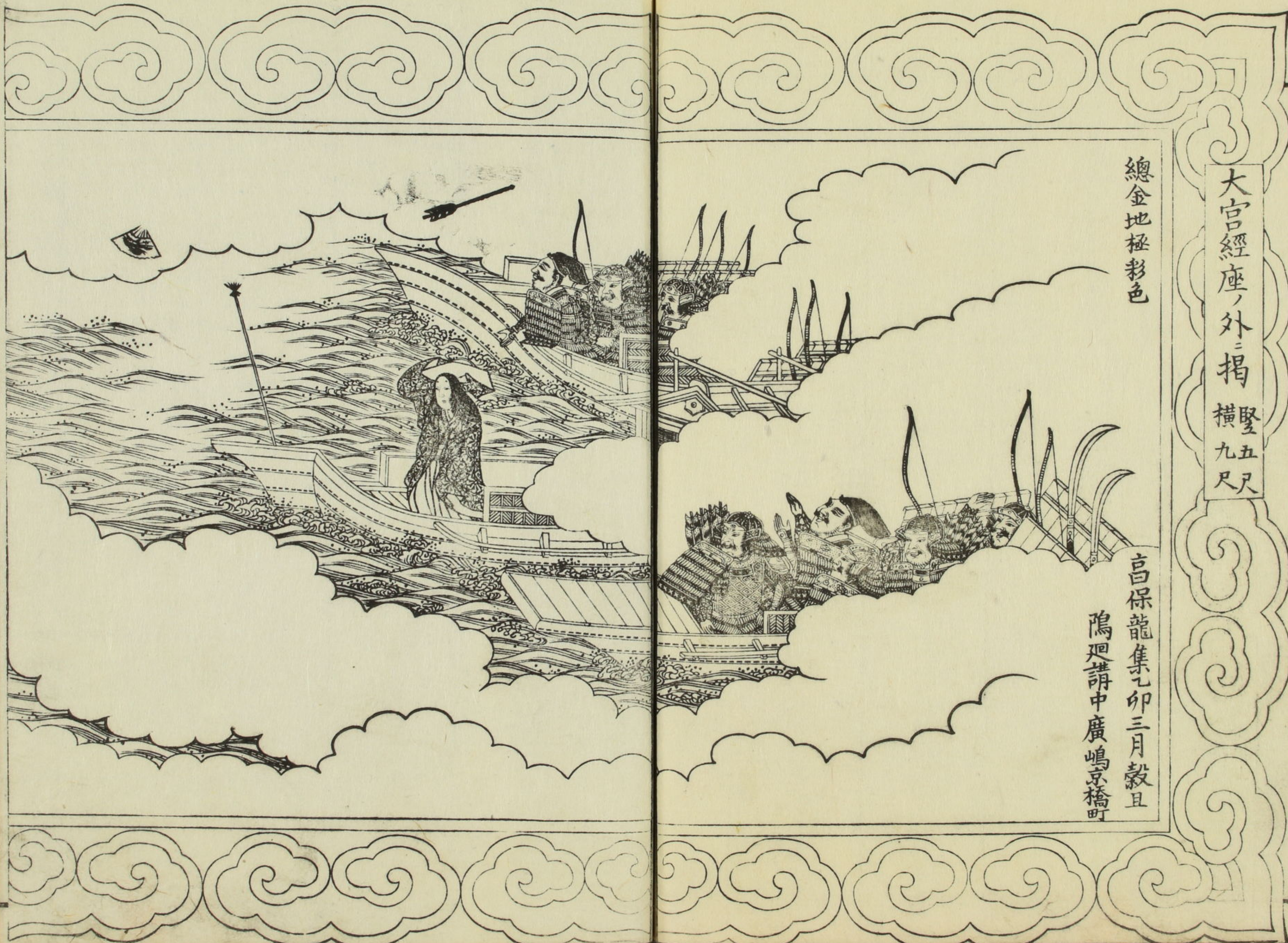
享保龍集乙卯三月穀旦狩野末流兒玉氏丹倫齋畫丹倫齋の世系未考

元曆二年二月十八日源氏の大將九郎大夫判官義經ハ讚岐國八島なる平家の大軍を追落し今日日暮ぬ勝負をけつを



べうべうとて源平互ふ引退處ふ平家の方より美々敷飾は小  
船一艘漕よを渚より七八段をうりはありて船を横さまにせりしれ  
船の中らと歳ころ十八九ごろの女房柳の五衣ふ紅の袴ま  
くろが立出て皆紅の扇の日出しなを船のせいのふはさきま  
源氏の方をぞ招き判官後藤兵衛實基を召てあれい  
ふとのまへと射よとにせしを俣らめ扇をを射さやまごもやい  
らんと申られを判官味方ふ射はぎ仁誰有と問ふへを  
手ども多中ふ下野國の住人那須太郎資高か子り  
與市宗高了と小兵でとれども手いまいてりともかきと判官  
さうと與市呼とて召たり與市其頃はやと廿ごろの男  
たるのらふ赤地の錦をもちて壬社いらとくも直衣ふ前甘威の  
鎧着て足白の太刀を佩二十四指をも切生の矢負薄截符ふ鷹  
の羽割合せて作らるるぬぐりの鎧をぞ指そへも濃藤の弓服ふ  
とと甲をも脱て高紐より判官の御前ふ畏てとらひるは  
判官いふ與市あゝ扇の真中射て平家ふ見をうと宣  
與市はふまらるるもぞんぞんは是を射損もるものあらば長き  
御弓箭の疵もてりもを必定仕らるる仁ふ仰付らるるもや  
ゆらんとまはりしれを判官大ふ怒て義經が下知を免角と申  
さん人の是より疾々鎌倉へ歸らるるも宣はる與市重て  
辭をばあしりふんとかりは然る外人もを知らず御鏡の重  
りをもはてしと見らるるて御前を罷立黒馬の太逞ふ丸を  
摺らば金覆輪の鞍置て乗出らるるありさよら此ころも必定





大宮經座ノ外掲  
横堅九五尺

總金地極彩色

高保龍集乙卯三月穀旦  
陽廻講中廣嶋京橋町



敬 揭 伊 豆 廣 前



伏祈 念願成立  
身心堅固

本列人為龍林尊滿  
謹書 □ □

狩野末流兒玉氏母繪畫



はざく／＼と見えたり矢頃を／＼遠く／＼を海の中へ／＼つれと  
るふもや扇の間七段をり見えたり折節北風烈吹て磯打浪  
も高く／＼船をかり上げりも漂を扇も串ふ定らば沖ふに平  
家船をあらべて見物と陸ふと源氏馬を並てこれを見共市目  
を塞で南無八幡大菩薩別して我國の日光權現宇津宮那須湯泉  
大明神の扇の真中射をて／＼ひひ／＼射損じものあらば弓  
切折自害してふ二度面を向べ／＼祈る／＼の中を憐れ  
目を開れを風も少／＼吹弱て扇も射がふ／＼に／＼共市鑷を取  
て打つ／＼引ひひ／＼ど放つ小兵／＼／＼十二束三伏弓の強  
鑷も浦響かど長鳴して／＼やま／＼扇の要際一寸をりおひて  
ひ／＼／＼と射切／＼鑷の海へ入／＼／＼を扇を空へを揚り／＼

澳み／＼平家船を／＼を扣て感し陸ふと源氏船を敵て／＼めまき  
了 盛衰記平家  
物語撮要

因云源平盛衰記云此扇／＼故高倉院嚴島御幸の時三十本折立て  
明神に進奉あり皆紅日出／＼扇あり平家都を落し／＼時嚴島社  
参り神主佐伯景弘の扇を出し是を一人の御施入明神の御秘藏を  
日々故院の御情を／＼され此扇を／＼敵の矢卻て其身に當  
／＼と祝言して参ら／＼を源氏射／＼／＼を當家軍の  
勝ぞ射お／＼を源氏利を得る／＼／＼と軍の占みぞえられ  
／＼と云く○又船扇の的を／＼女房の建禮門院の立后の御時  
千人の中より撰出／＼雜仕／＼玉虫の前も又／＼舞の前も申今年十九  
歳云く○此扇の残り今嚴島寶庫あり高倉帝の進奉御製歌  
等久我道親卿の華と／＼扇面銀と／＼片骨付両面御製歌等有







今表のころふりたる道親卿の筆意凡そ白字のどしどし  
但しころへくふづる詞花集ふよころをたころと

○源綱誅羅城門鬼之圖 竪八尺 横九尺 本社内陣奥向ふ掲

永祿十二年睦月三日狩野民部丞藤原直信筆 直信又松榮  
とひつ又伯信と稱古法眼元信の第三の子あり法眼位ふ叙一  
家法を襲ふ歳七十四ふりて没

此繪馬々當社大宮の棚守の寄附して直信棚守の書院ふ  
おいて畫きたる時一人の僧忽爾と現れ緋衣を着て其身氣  
たく筆を執嚴島大明神御寶前心中如意求願満足處也とらしく  
と認めけるふ一座の諸人大ふなるき如何あるひとと尋られば件  
の僧々のまけをどくうをう是と名彌山の大天狗の所為あら  
んとし形くやらまきりうとせふ傳てふ繪の鬼は三眼ありて

中眼の一点をも天狗の作とみ非あり

○源頼光と申し清和天皇の皇子貞純親王の御孫多田満仲の御子  
あり武畧並ふき名將あり鎮守府將軍ふ任トふ君臣を  
侶々を以て集と云習ふ頼光の御内ふ貞光太子武綱公時  
として名譽の豪勇四人あり世の人これを頼光の四天王とを申  
る或時春雨ふりはきて淋敷み徒然とをあらきまんとて頼  
光の御館ふの四天王を召されて酒宴どもけえられ各心の底  
意あくとりぐみ物語はく真下りるふ折節貞光申るはらの  
ごん東寺羅城門ふ鬼神の住て夜ふく人をとり殺つぐく  
とも形く失ぬると聞ゆるより申れを綱聞もあへ何と貞光の  
卒忽ふ事と申とのふ一天四海の内王地あらはれりて



永祿十二年睦月三日獨野民部丞

藤原直信筆



木社内陣奥向小掲

横八尺

尚大月神佛護前後百心才如之求取波乙事也

總金地極彩色



右繪馬

裏書：右之繪馬棚守先祖從四位下修理大夫  
房顯奉納之何且附録之天杓之作之端書  
左不縮めて出以益損して見分がらき文字私  
意を加へ其俣不出るいと怪むと勿レ

与大明神  
奉饗之前儀

心才如道末  
願海乙交  
也





れ假令鬼神のちねごとて住まて置るるにまらうそれと定て  
虚言あらんとまゆりれを貞光大に怒り我等君の御前にて偽  
を申べまら人を疑もやなるとれとて既ふ太刀の柄も手をかかれを  
綱も何事ぞとをうりおひ既ふさとよと見えたる所ふ頼光  
の御智乃保昌も其席ふ居うひて二人が中を推りかして折らうと  
いひ君の御前ふくおとふがねきうまひも其鬼神の沙汰我ら  
も聞及う今夜四天王と俱ふ羅城門へ行向ひ實否を正さんとい  
兼ておひよととらうく朋輩の諍第一君への不忠ありと諫られ  
兩人とも静まりたりされも綱も口惜くやおひいん鬼神の實  
否を正んとて歴々の輩う大勢はれて向んと人も我も耻辱あり  
る我等一人行向ひ誠ふ鬼のあるあらん生捕もて歸るべし

又次女もも見えぬあらう羅城門の石垣ふとら一の札を建置て歸  
らんとぞ望るる頼光も是を聞かひてそれとてべしとぞおとら  
既ふ日も暮夜も深更ふ及たれを綱も黒皮威の腰巻ふ五枚兜の緒  
をいぢへもの作の太刀を帯八寸黒とて長ある馬ふらちゆりたり  
しも春雨うらまきり目さ守も見えぬ闇夜ふ口一騎志はりの札  
を弓手ふらち羅城門へへ行向ひされも鬼神の空言もて物音  
少もてざりたり綱もそれとてと獨言してまら一の金札を心静ふ  
建かきて馬の首をうりく一歸るるとも所を羅城門の大屋  
根の上より兜の綴をむとと握んで虚空をきうておとらんやと  
綱も掴みぬがらちつとも騒ぐ太刀を抜空さぬふまらうとら  
鬼神の片腕うち切て其まらとらとほらみあがら東寺の庇



の上みぞを落くりりふ

○渡邊綱ハ山州の人河原左大臣融公の末裔あて嵯峨源氏あり渡邊黨の始祖たり祖父武藏の任ふむむき箕田入住を依て箕田源次と云萬壽二年の春歳七十三あり死を

○渡邊綱鬼を斬と度々往昔ハ強盗も妖術を行ひ或を身入丹朱を塗をりて鬼形を似て人民を狂惑し劫盗をなすきと云綱ハ四天王の内にも殊小勇猛のまゝえあれを恐るき強盗を度々斬りおとされは是彼の説實否を論と寸只綱の豪強せよと云れ英雄ありと云思ひしるべきとのま

○松竹梅之圖

堅九尺余 横二間余

本社内陣南向不掲

安永六年中夏吉且崗煥畫 通稱岡利源太名煥字君章 號岷山本藩士

○松 史記龜策傳ふ松柏ハ百木の長とて門閭を守ると

古今集

松のみにてとるまねとてけのもまきりり

後松遺賀

能因法師

○竹 蕭穎子竹篇ふ君子心を東とて惟これ正直と

續千載賀

後二条院 御製

堀河百首

仲實

松竹種類あり今こゝに畧に



大宮内  
陣南  
向之揭

誠 精 之 所 應

奉揭

尚煥寫

臥九尺余  
橫二間余

安永六年仲夏吉日





世諺問答不門松の事をいふ門の松植るはむむと架り来ると  
あるは松千歳とちりり竹を萬世を契るものあれを羊の  
始に祝いもらふと一糸禪問の仰き侍るべきありと

○梅潜確類書云梅は四貴有り稀あるを貴びて繁きを貴  
むは老を貴て嫩きを貴むは瘦きを貴て肥きを貴  
むは蒼を貴て開くを貴む○范至能梅譜云梅は天下  
の尤物智愚賢不肖を問はんとあて異議あるとふ  
学圃の士必先梅を種下畧○時珍云前畧或云梅は媒あり  
衆味を媒合と云○續日本紀云聖武帝天平十年七月  
殿前の梅の樹を指て諸子勅しての玉り朕去春より  
此木を稱んと欲していま賞翫するはかたけ空く各この梅

の樹を詠ぐ文人三十人各春のありを賦す詩有り百濟の王仁梅  
は謂て此花と稱せしむ○飛梅○好文木○鶯宿梅○求来願  
之等の異名勝枚擧ぐり今に畧す

○百人一首之圖 豎三尺三寸 横二尺余 本社總廻廊左右に掲

羊号詳から度畧してこの四圖を出れこの四圖の中前三圖は法眼  
春川畫和歌を周平書秋の田のより戀とてふまで五十首を掲  
春川々前ふは法眼春卜養子有元氏の子名は甫政と稱  
は能家法をいふ安永中ふ没も周平は浪華蒙所門人夏嶽  
杖氏名世儀字外庵新興周平とふ後の順徳帝の一圖を画所  
預土佐守藤原光貞畫歌を萬里小路前大納言政房卿の真蹟



百人一首之内四枚板出内三葉

畫法眼春卜養子甫政筆  
歌蒙所門人周平書

天智天皇

秋乃由緒

一のありの

彦岩

中流よりあら

見

秋のあそび ぬさつ

あそびあそび



色彩極地金總

本社總廻廊左右掲

堅三尺二寸 願主 瀬野住 藤原正信  
横二尺余 願主

願主 豫州周敷邑 佐伯紀豊

蟬丸

左神也これ

行も

あそび

あそびあそび

あそび

あそびあそび

あそびあそびの巻

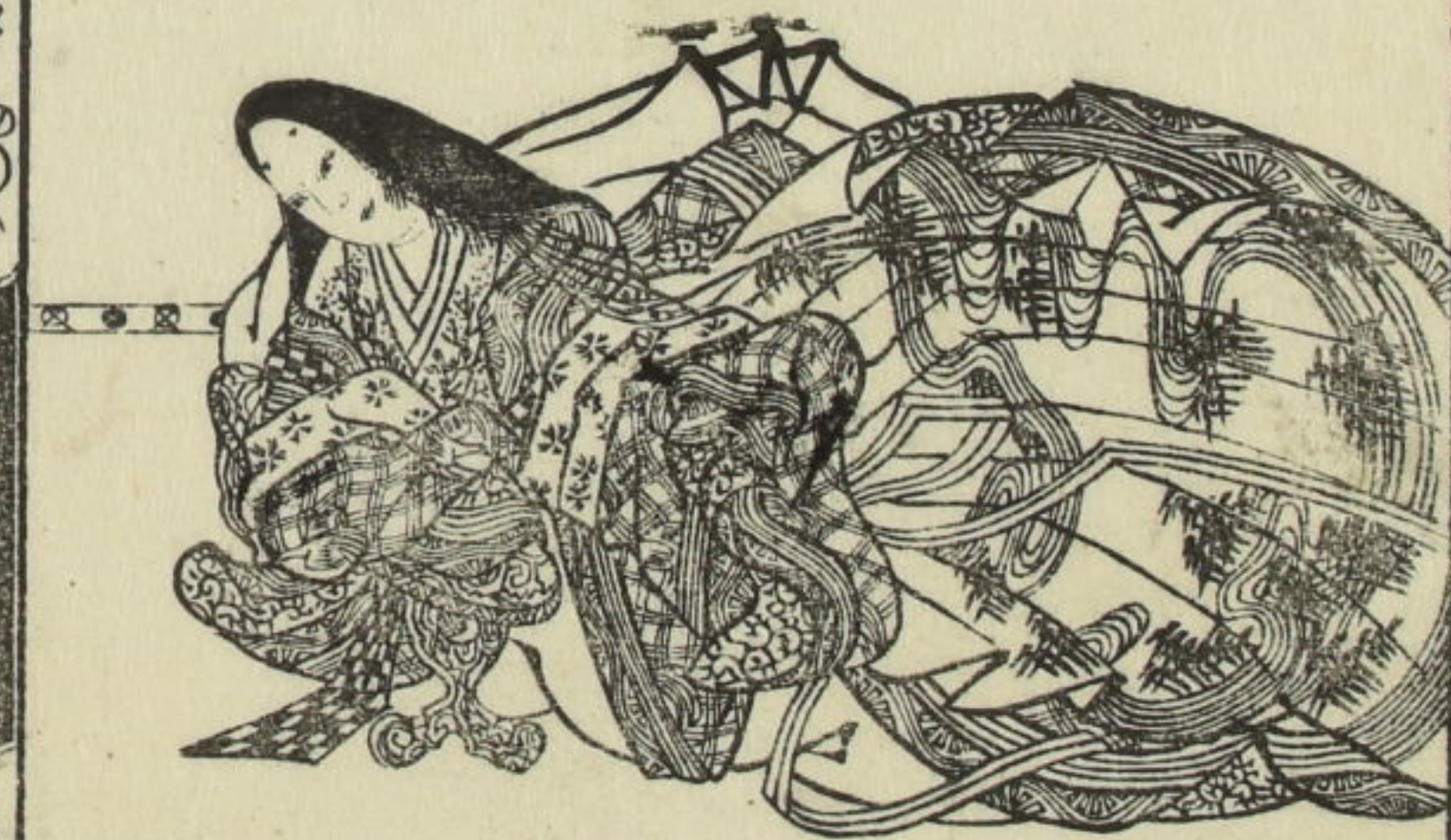


同



祭式部

也ああひき  
美し如  
そ種も  
わのぬ間子云  
陰達へ  
おのの月の子



願主不知

同

願主院百友

屋ありけ肝端  
志はぬゆも  
頼はまふあふ  
まかへ成家理



願主

三階屋七右衛門  
小瀬屋又右衛門

同



あつとらりちらぎりきんもと一りぎまでの圖五十を掲ぐ其一  
らつり

因云天智天皇の近江大津宮御宇天命開別天皇之大御父の舒明天皇天  
御母の皇極天皇へ

○蟬丸の姓氏祖をれを後選集にを氏をもらしを説くべし又盲人と云説

延喜の皇子と云説あまも非あふし又逢坂の四宮川を蟬磨の古蹟とて延喜

第四の宮の證と云らるる僻言ありて後選集雜の部に相坂の關ふ庵室と作

て住侍りたるふ行ふ人を見くとあり盲人あふまの證と云べし

○紫式部の中納言魚輔卿の孫より從五位下藤原為時の女ありは左衛門

佐宣孝の妻と云宣孝身ありて後中宮彰子にはくまるとり紫と云は美

稱と云と云べし種々の説あれは叶は紫と云ふと今いふ

○順徳院を守成天皇あり大御父の後鳥羽院大御母の贈左大臣範季公の女修

明門院藤原重子ありて此天皇を賊臣と為承久三年七月佐渡の國へつされ

ひ仁治三年九月の國より崩す

○寒山拾得の圖 竪五尺 横二尺五寸 本社内陣東側小掲

元和元年乙卯六月吉日松田休庵筆 休庵世系未考

寒山々和漢三才圖會云世に貧子と稱す風狂の士なり 唐太宗帝 貞觀七年

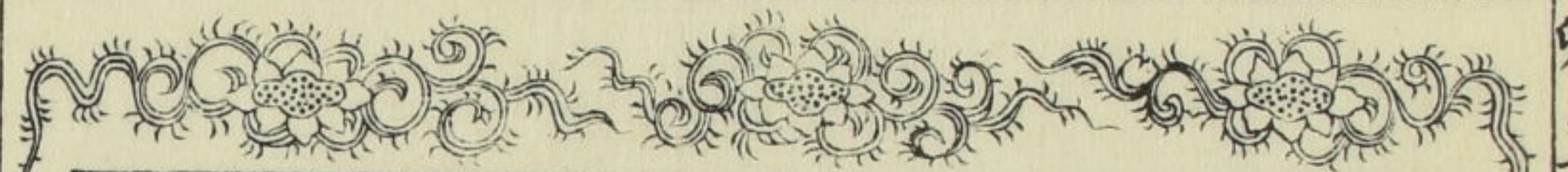
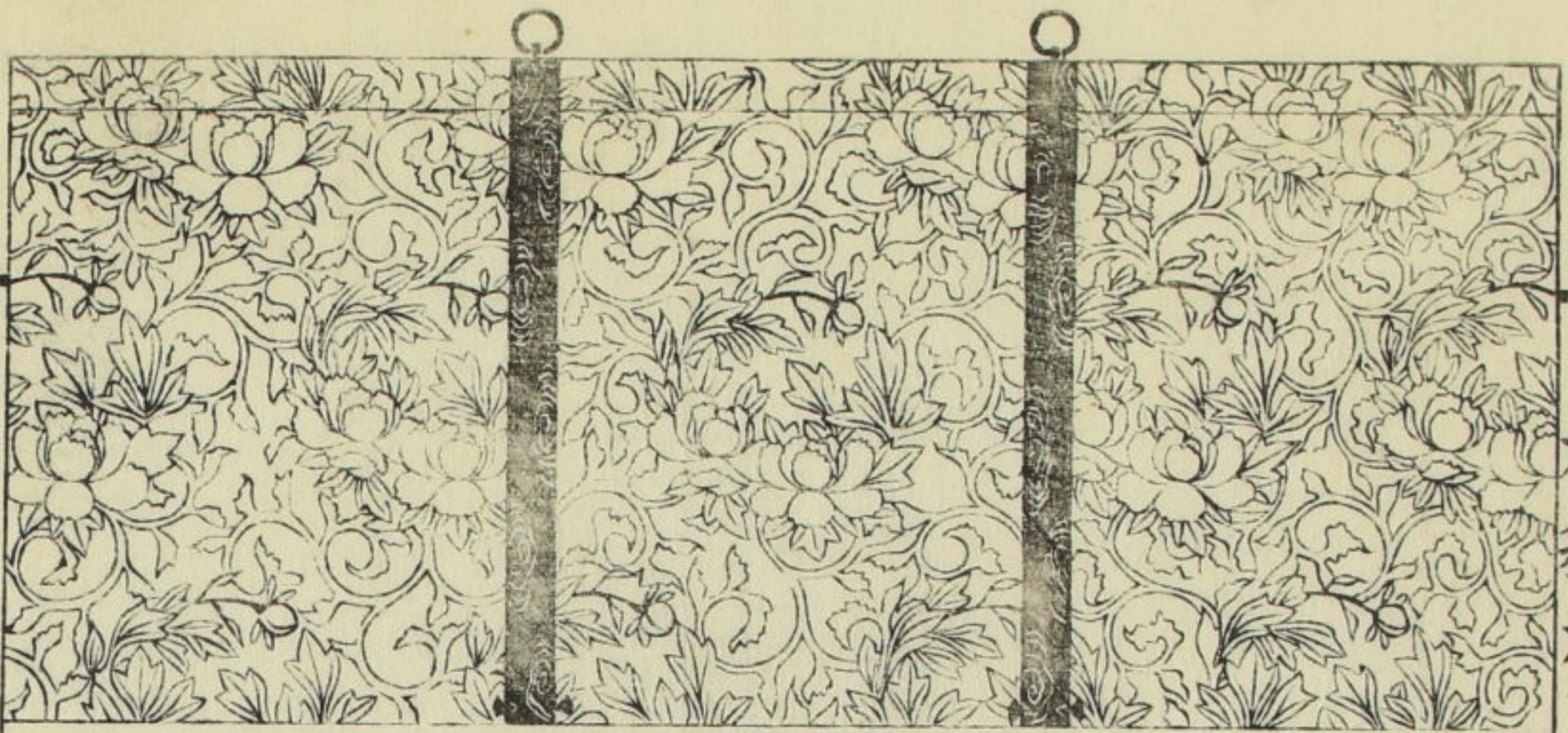
天台山の西に隠れて毎に寒岩幽窟の中を居る時小國清寺詣り拾

得と云もの有り衆僧の殘食菜の滓を收め拾ひて巨竹を斷筒とて

内を投藏先若寒山来れを即負て去云下畧



元和元乙卯年六月吉日



五峯石上双洵  
松邊是者伎倆  
莫罵豐干

松田休庵筆

泉品傑作  
何様なるか  
高寺冬分



本社内陣東側小掲

竪五尺  
横二尺五寸

本社組入の外正面小掲

竪七尺  
横四尺余

願主 廣島富士屋吉兵衛  
余々畧々

子ぬ地

平安  
そのまゝ





拾得と豐干禪師偶山行して赤城ふりて道の側小兒の泣聲を  
聞てこれを探りて一子を見り數歳をりりの弃子に禪師携へて  
國清寺ふ到りて後食堂香爐をあらひ然るに坐ふ登りて像と盤を  
對して食ふ其不法あるはあゝ其堂任を罷られ厨内の器を滌り  
是に於て食の滓を澄し濾して筒をりてこれを盛寒山子が來れ  
必負ふく去る又護伽藍神の廟へ毎日僧厨より食をよる鳥鳥の爲  
ふ授りて拾得杖をもつて土偶を打罵くふ汝が食をくら護ると能  
むして安ど伽藍を護んや此夕神夢み園寺の僧ふ告て云拾  
得我をたぐりて翌日衆僧互ふ夢を説き始て常の人ふ非ると  
をりて時ふ州縣郡ふ牒申符下りていふ賢士の隱道菩薩乃  
應身をりてこれを旌びりと拾得を號して賢士とち嘗く

道翹寒山子の文句を纂録し又寺の土地神の廟の壁に拾得の偈詞  
を見り寒山集の中ふ附し。○寒山拾得の西土地地理十五省の内浙江  
省の人あり

○兒持山燒之圖

堅七尺 横四尺余

本社組入の外正面に掲

年號月日圖中みえり蘆雪畫 蘆雪は長澤氏名に魚又引裾と号り  
山城淀の人

此圖を按もるふ元來坂田公時が親子ありて則賴光の從者に  
四天王の壹人あり天延四年三月廿一日総州の太守賴光朝臣下り文  
をむりて上洛の途より相摸國より足柄山ふりてり嶺より向乃  
岨を道逢りくふ雲氣あり賴光のふり彼所より一定人傑隱き



居るべしとく渡邊の綱を召て求せさせのふふをうて怪敷萱屋  
お老嫗一人二十をりの童子と對居りき綱を求て太守の  
前ふまへを太守姓名を問うるお老嫗がいそぐ天地の間ふりれ  
て何と姓ともん太守まこのひそく童子の汝が子あるや父の誰ある  
ぞ老嫗がいそぐ我子ふて父あり妾ありてこの山中ふ任と年久  
一日寐りし時夢中ふ赤龍来て妾ふ通をその時雷鳴影りて  
夢覺り果してこの子を乃子む生れり二十一年を経りきと  
太守悦びふれを得る綱當坐の會釋していそぐ誠ふ公に事  
るふ時を得りりとととと其名を坂田公時とととと時り  
治安元年七月廿四日頼光朝臣逝去り四天王の各三月かあ  
ど如在廟所寺の墳墓ふ參禮をばく三月満參の時廟所と

三士ふ暇をうて行くとあれは離散は各々阿すこの人をもりて跡を  
追りむふ伊豆の足柄山ふて形を見りいそぐととと前太平記の  
○公時の酒田主馬丞父多赤龍母多老嫗子孫あり山嫗乃  
説りりりり今畧に



